

# ライフ・イズ・コメディ〜ピーター・セラーズの愛し方〜

2004(平成16)年12月14日鑑賞(東宝試写室)

★★★



監督＝スティーヴン・ホプキンス／出演＝ジェフリー・ラッシュ／シャーリーズ・セロン／  
ジョン・リスゴー／ミリアム・マーゴリーズ／スティーヴン・フライ／スタンリー・トゥッチ／  
エミリー・ワトソン (東芝エンタテインメント配給／2004年アメリカ・イギリス合作映画／125分)

## 第3章

じっくり、しっとりと

……『ピンク・パンサー』シリーズで人気を博し、1980年に54歳で死亡した  
実在の俳優ピーター・セラーズの人生を描いた映画。『ピンク・パンサー』  
は知っていてもその他の作品は知らないものばかりだったが、その破天荒な  
生きざまには共鳴すると同時に同情も……。こんな「伝記映画」の製作は難  
しいものだが、私はそれよりもシャーリーズ・セロンの美しさにうっとり！



### ピーター・セラーズとは？

ピーター・セラーズは1925年に生まれ、1980年に54歳で死亡したイギリス人の  
俳優。『博士の異常な愛情』(64年)と『チャンス』(79年)で2度のアカデミー  
賞主演男優賞にノミネートされたとのことだが、私はその映画は全然知らない。  
しかし『ピンクの豹』(64年)以降シリーズとして続いた『ピンク・パンサー』  
2、3、4は、1本か2本観た記憶があるし、コミカルなクルーザー警部の印象  
は私の頭の中に残っている。今なぜ彼の人生を描いた伝記映画のような作品が作  
られたのかはわからないが、この映画で描かれる「20世紀最大のコメディ俳優」  
と言われる彼の人生は、破天荒で興味深いもの。54歳という短い人生の中で、4  
度の離婚と8度の心臓発作を経験したという彼のコメディ俳優としての能力は、  
良くも悪くもマザコン(?)人生の中で形成されたものようだ……。



### 客観的にはヘンな奴！

喜劇俳優としての類まれな能力は、『ピンク・パンサー』シリーズを撮ったブ

レイク・エドワーズ監督や、『博士の異常な愛情』と『ロリータ』で彼を起用したスタンリー・キューブリック監督らが高く評価しているが、この映画からみれば、彼の使い方は難しかったようだ。スタンリー・キューブリック監督だけは、1度も悪態をつかれたことがないそうだが、ブレイク・エドワーズ監督などは、ボロクソに言われながら、作品を作り続けたようだ。

俳優などという職業の人間は、自己顕示欲の固まりみたいな性格でなければつとまらない面があるのは当然だが、それにしてもこの映画でみる限りピーター・セラーズはヘンな奴！と言われても仕方がないもの……？ もちろん本人は悪気がなく、あっけらかんとした子供みたいなものだが、その「子供」の面倒は、ママのペグ・セラーズ（ミリアム・マーゴリーズ）以外の女性が見てやることは不可能かも……？ ペグは息子に対していつも、「頑張れ！ 頑張れ！」の号令を発するとともに、とにかく息子を溺愛していたため、息子はいつまでたっても「ママ離れ」ができなかったようだ。最初の妻アン・セラーズ（エミリー・ワトソン）も、2度目の妻ブリット・エクランド（シャーリーズ・セロン）が、そんな彼を見放したのはある意味当然のこと……。

### 華やかな女遍歴は生まれつき……？

映画の中でピーター・セラーズは、「美女に目がない男」として描かれているが、きっと実際の生活でもそうだったのだろう。ビックリしたのは、『求むハズ』（60年）であのイタリアの大女優ソフィア・ローレンと共演した時に口説いていたらしいこと！ さらに2度目の妻ブリット・エクランドは、『007／カジノ・ロワイヤル』（66年）で共演した女性とのこと。4度の離婚は、美女なら誰でも次々と目をつけて口説いていくピーター・セラーズとしては当然の結果（？）だし、その華やかな女遍歴はきっと生まれつきの性分なのだろう。数々の映画に出演してタツプりと出演料をもらっている大スターなのだから、それはそれで楽しいのかも……？

### シャーリーズ・セロンの美しさに拍手！

『モンスター』（03年）での怪演（？）によってアカデミー賞最優秀主演女優賞

を受賞したシャーリーズ・セロンは、その後の『トリコロールに燃えて』(04年)では本来の美貌をスクリーン上で発揮していたが、この映画でも彼女の美貌は健在。というよりも、最初の妻アン・セラーズと離婚した後、「もう2度と女性と恋することはないだろう」と思っていたピーター・セラーズが一目ボレして、たちまち恋に落ちていく相手としてはまさに適役。本来の美しい金髪を見せながら恋に落ちていく彼女の姿は実に魅力的。この美しさには無条件で拍手を送りたい!

### シャレた邦題は大ヒット!

この映画の原題は『The Life and Death of Peter Sellers』だから味もそっけもないもの。これに対して邦題は『ライフ・イズ・コメディ!』とまさにピーター・セラーズの生きざまに焦点をあてたうえ、「ピーター・セラーズの愛し方」という実におシャレな副題をつけている。ピーター・セラーズという俳優の名前だけでわかる観客は少ないはずだから、こういうシャレた邦題をつけると観客は興味を持つはず。このシャレた邦題は大ヒットだと私は思うが……?

### こんな映画づくりは難しい

主演俳優の苦労が並大抵のものではなかったことは、パンフレットを読めばよくわかる。そりゃピーター・セラーズの外見に似せるだけでも大変だし、彼が映画で演じたさまざまな役をそれと同じように演じなければならないのだから何通りもの表情や声を用意する必要がある。こんな役を演じたのは、『パイレーツ・オブ・カリビアン/呪われた海賊たち』(03年)でキャプテン・バルボッサ役を演じた1951年生まれのジェフリー・ラッシュ。コメディものからシリアスな作品まで何でもござれの名優だが、どうも私的にあまり印象に残らないのは、どうしても私の目が女優ばかりにいくせいだろうか……? 主演俳優としても、また台本づくりにおいても大変な苦労があったことはよくわかるから、「ご苦労様でした」と声をかけたいものの、残念ながら大きな感動を感じるほどでは……?

2004(平成16)年12月15日記